

京林大だより

No.20



絵:卒業生 熊走君

ドイツの林業を見てきました



林大2年生が今年もドイツ研修に行ってきました(5月19日～26日)。

ドイツは明治時代のはじめ、我が国が林業の手本として学んだ国です。大きく育った木々が多く、木材生産も活発に行われています。

林大生は、ドイツの若者が林業を学ぶマッテンホフ職業訓練校を訪問し彼らの体格の良さにびっくり。

でも林業のプロを目指す心は同じ。親しく交流をしました。



ドイツならではの大きな林業機械です

実はドイツ全体の森林率は30%ほど。

京丹波町の方がずっと森林率(83%)が高いのです！

地域の森林を育て活用して豊かな未来を作っていきたいものです。

林野庁長官が林大生を激励

林業の担い手育成は国全体の課題です。

京都の林大で学ぶ学生を激励するために、6月12日林野庁の今井長官が来られました。

この日、府民の森ひよしで林業機械の操作実習中の学生に「頑張ってください」と親しく声をかけてもらいました。



★オープンキャンパス★

今年は8月1日(土)に開催

午前中は学校説明。
午後は高性能林業機械を実演します。
普段は見られない、山の中で木を切り出す仕事ぶりを間近で見てもらえる良い機会です。



校長室より

『奈良春日大社式年造替』

校長 只木良也

一昨年は、伊勢神宮第62回式年遷宮の年（→京林大より8, 9号、平成25年7, 9月）。

今年から来年にかけては、60回目の奈良春日大社で。ただしここでは、式年造替（ぞうたい）という呼び名です。共に神殿や神宝、調度品などを作り替え、修復する大きな儀式なのですが、その方式が少し違うのです。

伊勢御遷宮では、隣り合う土地で交互に20年ごとに神殿新築を繰り返し、御神体はその都度新殿に御遷座、これに対して春日大社では、まず仮神殿である移殿（うつりどの）を設けて御神体を遷し（外遷宮）、そのお留守の場所で本殿を新築あるいは修復して、完成後に御神体の還御（正遷宮）となります。

もちろん、国宝の春日造り4棟の本殿以外の、30万坪の境内に配された十数棟の建造物も御造替の対象で、その修復の要点は、屋根の檜皮葺き替え、壁の塗り替え、木質部の朱塗りなどです。

今回は、平成19年の一ノ鳥居より始まり、今

年3月27日に外遷宮、来年平成28年11月6日正遷宮をもって完了と計画されています。

春日大社は約1300年前の創建。造替の儀式は、奈良時代の770年（伊勢神宮は690年）に始まり、原則20年ごとに行われ、古くは毎回の御神殿新築でしたが、明治以降は修復のみとのことです。

ところでこの御造替に使用する木材が、本殿はヒノキ材であるのは当然ながら、移殿はマツ材であるのが初回以来の伝統といえます。初回の770年頃は、飛鳥から天平時代にかけて、日本文化の大成長に伴って、大和平野周辺の森林も酷使され、荒らされた山にはやせ地にも耐えるマツ林が拡大した時代ですから、仮の神殿だからと、高級なヒノキの代わりに周りに有りふれたマツを使ったのでは、と思うのですが、それが「伝統」として伝えられてきました。

ところが現代では、昭和期後半以来のマツ枯れ病の拡大で、かつての里山の代表だったマツは影を潜めました。御造替用のマツ材調達にも苦労多いのが現況とのことです。

今月の授業参観

森林計測

林業の現場は森林です。
森林の面積を測ったり、道を設計するために測量の技術はとても大事です。
学生たちは、測量の基礎から、最新式の機械が扱えるよう繰り返し学びます。



コンパスを使って森林面積を計っています。